

『大抵御覽』注釈稿(下)

伴野 英一

(国語・国文学)

(令和三年十二月十五日受理)

はじめに

前号に続き、安永八(一七七九)年刊、朱楽館公・朱楽宿寐(朱楽菅江)作の『大抵御覽』に注釈を施す。上・中・下の最終回。底本書誌などについては前々号を参照していただきたい。

本稿作成にあたっては底本を借覧させていただいた所蔵者に改めて感謝する。また、未だ至らぬ点も多いので大方のご批正を乞う。

翻刻凡例

- 一、翻刻にあたっては可能な限り底本通りにすることを目指した。誤脱と思われる箇所も底本通りに残し、語釈において指摘した。
- 一、丁移りはその丁の表及び裏の末尾に、表であれば(ㄱオ)(ハオ)、裏であれば(ㄱウ)(ハウ)などと、底本の丁付通りの漢数字と表

裏の略記を組み合わせ示した。なお丁付を欠く場合は(丁付なしオ)などとした。

- 一、句読点は底本通りとした。
- 一、仮名は現行の平仮名に改めたが清濁は底本通りとした。明らかに片仮名で表記しようという意識をもって書かれたと思われる片仮名は底本通りとした。
- 一、繰り返しを表す反復記号などは底本通りとした。
- 一、漢字は原則として新字体に置き換えた。ただし特記すべきだと考える表記については語釈において指摘した。
- 一、作品・引用文中に現在の人権意識にそぐわない語句・表現があるが、歴史的資料である原文を尊重してそのままとした。

【挿画】（丁付なしオ）



《翻刻》
 とうぶしやうにしたかた
 東武城 西高田のうま場の側に長四郎といへる隠士ありみづから
 くはくだだひきをゆゆる
 郭橐駝に比して種樹ことをもて業とす少時より富士浅間を信仰し
 奉りて年ごとに夏秋両度ツ、詣侍りしが既にして大先達と称す春秋
 つもりてこゝに七十古来稀なる信者也年来（丁付なしウ）此山に攀
 ること五十五度山の中腹をめぐるを中道といふなべての先達中道を
 するもの稀也長四良中道すること三十余度時にふれて山の上おと

ろくしうあれてあらゆる行者ふるへおのくの刻も大先達長四良
 さふらう 侍 とたからかに名乗れば忽山おだやかに晴わたりて一点の雲な
 しまことに浅間大ぼ（丁付なしオ）さちのこれや妙慮にかなへるな
 るべし今や志千里にありといへとも心のほつする所のりをこえす
 たが鉢植を叩て伏櫪をうたふさすれば杖をひくとも莽蒼に過すこと
 し安永八己亥のとし近きわたり戸塚村稲荷山の別当宝善寺の境内に
 せんげんだいほまつくわんせう
 浅間大菩薩を歎請せんと思ひたち諸人の（丁付なしウ）脱髪をこゝ
 にうづみて二月三日より富士行者何がしらはじめてかたはらの
 山をきりたいたらげその土を以て新規に山のかたちをきづくそれより
 らうにやく
 老若男女を論せすうふこはふこにいたるまでわれもくと土をは
 こぶ力すくれし壮士は十人前も一人てはこび或は一もつこや或二も
 つこや又やごとなき姫御（丁付なしオ）前も紙につみてそれく
 に多少を論ぜず土持してだんくつもる一簣の功終に九仞の山とな
 れり山は八葉洞のこし駿河の富士の正写し山をなつてて養芙蓉と
 いふそれより大江戸四里四方われおとらしと寄進するは石の鳥居に
 くろき
 黒木の鳥居石檀垢離場手洗鉢其外何くれそれくみにな（丁付な
 しウ）人たのみをかけ念仏声のたえまはあらざりけり麓中腹絶頂
 の社檀の経営日あらずして既に成就なしければ切こそ五月廿八日何
 がし院法印くれがし院の阿奢利あまたの権者打よりて山の開眼こと
 おわ
 終れば新たにたてたる神楽堂天津乙女もいそがしく目のまひ足のふ
 み所もしらゆふかげにくれ残るあか（丁付なしオ）ひはかまの柳こ
 し神楽の太鼓度拍子はいつもどんととなるがよし諸人の信心菩薩の

妙^{めやうりよ}慮^り長四郎^{ちやうしやうらう}が本意^{ほんい}とけさせ給ふありかたしなともいふはかりなし
山^{りやう}を領する御神^{みかみ}には 中腹^{ちゆうぶく}に小御嶽^{こみたけ}石尊^{いせきそん}大権現^{おほけん}麗^{れい}に浅間^{せんげん}大菩薩^{だいぼさつ}
也^{なり}そもく 浅間^{せんげん}大ぼさつと申奉るは大山^{おほやま}祇命^{せいのみ}の箱入^{はこいり}御娘^{みむすめ}よい子^こ
の木華開^{このはなさく}(丁付^{ちやうつけ}なしウ) 耶媛^{やひめ}こゝに跡^{あと}たれ給ふことみな人^{ひと}しれる所^{ところ}
なりまことや孝靈^{こうれい}天王^{てんわう}五年^{ごねん}近江^{ひはのうみ}琵琶湖^{びばこ}つる一夜^{ひとよ}子をはらみしよ
り駿河^{するかのくに}の富士^{ふじ}の山^{やま}ひよつくりひよつと誕生^{たんにじやう}せしも今度^{こんど}の富士^{ふじ}の
出来事^{できごと}も思^{おも}ひもほけぬこと成^なかし

《語釈》

●東武^{とうぶ} 東方^{とうほう}にある武蔵^{むさし}国の略称^{りやくしやう}。また江戸^{えど}の異称^{いしやう}。この場合は後者^{こうしや}。
「同く二丁^{にちやう}めへあつまり住^すし者は。東武^{とうぶ}日^ひくはん^{えい}におもむぎ。
此度^{このたび}吉原^{きげん}丁^{ちやう}開基^{かいかい}のよしを聞^きて。上方^{かみかた}のけいせいや。おるく^{くだ}に下^{くだ}りて。
此^{この}丁^{ちやう}へうつる」(明和^{めいわ}五^ご一^{いち}七^{しち}六^{ろく})刊^{かん}『吉原^{きげん}大全^{たいぜん}』卷^{まき}之一^{いち} ●高田^{たかた}
のうま場^{うまば} 東京都^{とうきよと}新宿^{しんじゆく}区^く西早稲^{さいばい}田^{でん}三^{さん}丁目^{ちやうめ}にあつた馬場^{うまば}。なお現在の
地名^{ちやうめい}は国電^{こくでん}(現^{げん}JR) 高田^{たかた}馬場^{うまば}駅^{えき}の名称^{なめい}による。本来^{ほんらい}は「たかた」
と清音^{せいおん}。「秋葉^{あきは}ヶ原^{がはら}に停車場^{ていじやうば}あり、之^{これ}をアキハバラ駅^{えき}と呼ぶ。鉄道省^{てうどうしやう}
の役人^{やくにん}には田舎^{いんか}漢^{かん}多^たしと見えたり。高田^{たかた}の馬場^{うまば}もタカダと濁^なりて読^よ
む」(『断腸^{だんちやう}亭^{てい}日乗^{にちじやう}』大正^{たいしやう}一^{いち}五^ご年^{ねん}七月^{しちげつ}一^{いち}二^に日^{にち}) ●長四郎^{ちやうしやうらう} 本作^{ほんさく}では高
田^{たかた}富士^{ふじ}を築^{きず}いた人物^{にんぶつ}の名^なを「長四郎^{ちやうしやうらう}」としているが、富士^{ふじ}講^{かう}の呪文^{じゆもん}
を集^{あつ}めた『富士^{ふじ}講^{かう}昌^{しやう}文^{ぶん}独^{どく}見^{けん}秘^ひ書^{しよ}』にある「中山^{ちやうせん}保^ほ高^{かう}自^じ序^{しよ}」(享和^{きやうわ}二^に
一^{いち}八^{はち}〇^{じゆ}二^に年^{ねん}識^{しき})によれば「高田^{たかた}藤^{ふじ}四郎^{しやうらう}」である。前掲^{ぜんか}書^{しよ}による藤^{ふじ}
四郎^{しやうらう}の略歴^{りやくれき}は以下の通り。「然^{しか}るに日行^{にちぎやう}青山^{しやうせん}藤^{ふじ}四郎^{しやうらう}には生国^{なまくに}但馬^{たにま}国^{くに}にて、

宝永^{ほうえい}三年^{さんねん}丙戌^{へいしゆ}年^{ねん}出生^{しうしん}仕^し、享保^{きやうほう}元^{げん}申^{しん}年^{ねん}十一^{じゆ}歳^{さい}にて江戸^{えど}表^へに罷^は出^し、享保^{きやうほう}
六^{ろく}辛^{しん}巳^し年^{ねん}十六^{じゆ}歳^{さい}にて、初^{はつ}て御^{おん}富士^{ふじ}山^{さん}に登^{のぼ}山^{さん}仕^し、享保^{きやうほう}十八^{じゆ}癸^{みづのへ}丑^{うし}年^{ねん}迄^{いた}
十^{じゆ}三年^{さんねん}の間^{のま}、食^{じき}行^{ぎやう}身^み禄^{ろく}□に随^ま身^み致^ち、信^{しん}心^{しん}に願^{ねん}入^に仕^し候^{こう}処^{ところ}、身^み禄^{ろく}□には
同^{どう}年^{ねん}六^{ろく}月^{げつ}十七^{じち}日^{にち}を御^{おん}名^な日^{にち}と御^{おん}指^{さし}遊^{ゆう}ばせられ、同^{どう}十三^{じゆ}日^{にち}御^{おん}山^{さん}七^{しち}分^{ぶん}目^め鳥
帽子^{ぼうし}岩^{いわ}元^{げん}□御^{おん}入^に定^{ぢやう}被^ひ遊^{ゆう}候^{こう}也^{なり}、其^{その}後^{のち}四年^{しよねん}を経て元^{げん}文^{ぶん}元^{げん}丙^{へい}辰^{しん}年^{ねん}初^{はつ}て江^え戸^ど
身^み禄^{ろく}同^{どう}行^{ぎやう}と申^{まを}を取^と立^た、元^{げん}祖^そ御^{おん}慈^じ悲^ひ御^{おん}願^{ねん}行^{ぎやう}の御^{おん}志^しを継^{つぎ}、信^{しん}心^{しん}相^{さう}続^{じゆく}仕^し候^{こう}て、
五^ご輪^{りん}の道^{みち}を明^あらめ御^{おん}伝^{でん}への道^{みち}堅^{けん}相^{さう}守^{しゆ}、安^{あん}永^{えい}二^に癸^{みづのへ}巳^し年^{ねん}迄^{いた}都^と合^{ごう}年^{ねん}数^{すう}
五^ご十三^{じゆ}年^{ねん}、無^む滞^{ぢやう}□山^{さん}禅^{ぜん}定^{ぢやう}大^{だい}願^{ねん}成^{じやう}就^{じゆ}仕^し、猶^{なほ}又^{また}万^{まん}法^{ぽう}衆^{しゆ}生^{じやう}老^{らう}若^{じやく}男^{なん}女^{にょ}濟^じ度^どの為^{ため}、
高^{かう}田^た水^{みづ}稻^い荷^か境^{きやう}内^{ない}に東^{とう}身^み禄^{ろく}山^{さん}と申^{まを}、□富^ふ山^{さん}の御^{おん}うつしを建^{けん}立^た致^ち、天^{てん}明^{めい}
二^に壬^{にん}寅^{いん}年^{ねん}行^{ぎやう}年^{ねん}七^{しち}七^{しち}歳^{さい}にて相^{さう}果^{くわ}候^{こう}まで、元^{げん}祖^そ食^{じき}行^{ぎやう}身^み禄^{ろく}□御^{おん}伝^{でん}へ被^ひ遊^{ゆう}
は、忠^{ちゆう}孝^{かう}正^{しやう}直^{ぢやく}慈^じ悲^ひ情^{じやう}堪^{かん}忍^{にん}不^ふ定^{ぢやう}第^{だい}一^{いち}に相^{さう}守^{しゆ}、面^{めん}々^{じやく}に備^びたる家^か業^{ぎやう}大^{だい}切^{せつ}
に相^{さう}勤^{きん}め候^{こう}事^じを信^{しん}心^{しん}の同^{どう}行^{ぎやう}へ教^{けう}へ示^し候^{こう}段^{だん}、難^{なん}有^{いう}御^{おん}事^じに奉^{ほう}存^{ぞん}候^{こう}也^{なり}」(『信^{しん}
仰^{おんぎやう}叢^{そう}書^{しよ}』による)(文中^{ぶんちゆう}の□の箇^{かん}所^{しよ}は序^{しよ}者^{しやく}独^{どく}自^じ、あるいは講^{かう}中^{ちゆう}でのみ
通^{つう}用^{よう}の異^い体^{たい}字^じかと思^{おも}われ解^{かい}読^{どく}不^ふ能^{にやう})また、本文中^{ほんちゆう}に「年^{ねん}来^{らい}此^{この}山^{さん}に攀^{はん}
ること五^ご十五^{じゆ}度^ど」とあるが、天^{てん}保^{ほう}六^{ろく}一^{いち}八^{はち}三^{さん}五^ご序^{しよ}『百^{ひやく}家^か琦^き行^{ぎやう}伝^{でん}』
二^に之^{これ}卷^{まき}「富^ふ士^し行^{ぎやう}者^{しやく}藤^{ふじ}四郎^{しやうらう}」では「七^{しち}十五^{じゆ}度^ど登^{とう}山^{さん}したりしとぞ」とする。
●郭^{かく}橐^{たう}駝^た 柳^{りゆう}子^し厚^{こう}(宗^{そう}元^{げん})の「種^{しゆ}樹^{じゆ}郭^{かく}橐^{たう}駝^た伝^{でん}」に出^いる背^{せい}の曲^{まが}がった
腕^{うで}のよい植^{うゑ}木^き屋^やのあだ名^な。「橐^{たう}駝^た」は「駱^{らく}駝^た」に同じ。「郭^{かく}橐^{たう}駝^た不知^{しらず}
始^{はじめ}何^{なに}名^な病^{びやう}儂^{じやう}隆^{りゆう}然^{ぜん}伏^{ふく}行^{ぎやう}。有^あ類^{るい}橐^{たう}駝^た者^{しやく}。故^{ゆゑ}郷^{きやう}人^{にん}号^{ごう}之^{これ}駝^た。《略^{りやく}》其^{その}郷^{きやう}日^{にち}豊^{ほう}楽^{らく}郷^{きやう}。
在^あ長^{ちやう}安^{あん}西^{せい}。駝^た業^{ぎやう}種^{しゆ}樹^{じゆ}」(貞^{じやう}享^{きやう}四^し一^{いち}六^{ろく}八^{はち}七^{しち})刊^{かん}『魁^{けい}本^{ほん}大^{だい}字^じ諸^{しよ}儒^{にゆ}箋^{せん}解^{かい}古^こ
文^{ぶん}真^ま宝^{ほう}後^ご集^{じふ}』卷^{まき}之^{これ}下^{した} ●種^{しゆ}樹^{じゆ} 前^{まへ}注^{しゆ}「種^{しゆ}樹^{じゆ}郭^{かく}橐^{たう}駝^た伝^{でん}」のタイトルによる。
●富^ふ士^し浅^{せん}間^{かん} 浅^{せん}間^{かん}神^{しん}社^{しゃ}(富^ふ士^し山^{さん}本^{ほん}宮^{みや}浅^{せん}間^{かん}大^{だい}社^{しゃ})。富^ふ士^し山^{さん}頂^{てい}に奥^{おく}宮^{みや}があ

る。「抑不二権現と申奉るは駿州有度ノ郡に鎮座まします祭ところ
 つみのみことむすめこのはななくやひめ
 大山祇命の女木花開耶媛にて是を浅間の社と申奉るされば神の
 れいみぎょう
 靈妙はかるべからず」(宝曆一三(一七六三)刊『風流志道軒伝』
 卷之五) ●大先達 先達は山岳信仰において山に入る際の指導者とな
 なるもの。大先達はそのうちの最も経験を積んだもの。「弁慶は先達
 のすがたとなりて主従曰上十二人いまだならはぬ旅姿」(謡曲「安
 宅」) ●春秋 年月・年齢を意味する「はるあき」「しゅんじゆう」
 からの宛字か。「歳」(略) 春秋 (節用集大全) 「路銀は養父の
 めぐみえ 恵を得てその準備さふらふなり。ねがはくは自愛して不老の門に
 とし 春秋を富し不死の仙姑となりたまへ」(文化四(一八〇七)刊『椿説
 弓張月』卷之六) ●刻 時。おり。「今はむかし浮世坊御まへにしこ
 う申せしきざみ 浄土宗の和尚きたられ いろく 仏法の物語有け
 る中に」(寛文初年(一六六一)頃刊『浮世物語』卷第四) ●浅間大
 ぼさち 」「ぼさち」は「ぼさつ」の呉音。「文蔵もつねに此ぼさちを
 信じ、何にても一芸に名を得させてたまはれと」(元禄七(一六九四)
 刊『好色万金丹』卷之一の二) ●志千里にあり…鉢植を叩て伏櫪を
 うたふ 曹操「碣石篇」による行文。「驥老伏櫪志在千里」(『宋書』
 第十一・楽三「碣石 步出夏門行」) 伏櫪は既の中で馬が伏している
 こと。 ●杖をひく 前々号「曳杖」の項に同じ。 ●莽蒼 青々とし
 た草木が茂った野原。 ●戸塚村 往時の高田馬場の北側に位置した
 集落。地名の由来には諸説ある。「今高田に属す古は此地の惣名とす」
 (『江戸名所図会』卷之四) 享保一七(一七三二)刊『江戸砂子(温

故名跡誌) 卷之四には「戸塚 高田の事也」とある。 ●稲荷山の別
 当法善寺 禅英山宝泉寺のことだと思われる。「稲荷と毘沙門両社
 の別当寺にして天台宗東叡山に属す」(『江戸名所図会』卷之四) ●
 脱髪 本来は「落髪」か。「鹿角脱」(『文明本節用集』) ●うふこはふ
 こ 産子(うぶこ)は生まれたての子。「塩竈の徳で産子を洗ひ上ケ」
 (『誹風柳多留』一一・二二) 這子(ほうこ)は這うことのできるよ
 うになった子。「這ふ子の口に人形の丹」(寛延三(一七五〇)刊『武
 玉川』初編・一二) ●壮士 壮士 (『書言字考節用集』)
 ●もつこう 畚(もっこ)。藁筵などの四隅に綱を付けて棒で担い土
 砂などを運ぶ道具。「そりてやいに前垂がけの競あれば。棒のさき
 にもつこうなどく、りつけて。かつぎあるくひやかしあり」(享和三
 二(一八〇三)刊『道中膝栗毛』後編) ●姫御前 若い女性。女性一般
 をいう。「家もふくく、ぢい様ば、さまと、様かか様。わこ様ひめご
 ぜ産ならべてふくく、ふくく」(正徳五(一七一五)初演『大経師
 昔曆』下之卷) ●一簣の功 九仞の山となれり 」「書経」 「旅葵」に
 ある「為山九仞功虧一簣」による行文。 ●八葉洞 胎蔵界曼荼羅に
 おける八葉の蓮華の中心に大日如来、および蓮華上に配置される仏
 菩薩を八葉九尊といい、富士山頂の火口周縁の峰をそれらに当ては
 めて「八葉」とし、山頂部を巡る修行を「御八葉巡り」と呼んだ。
 現在では「八神峰」「富士八峰」と呼ぶ。どの峰を選び、何の仏をあ
 てるのかは記録者や年代によって違いがある。「洞」の語は未詳。「絶
 頂には小山あまたあり八葉の蓮華の形也」と云は強て名付るなり峯の

間数名あり 浅間岳 薬師岳 観音岳 地藏岳 阿弥陀岳 大日岳
 雷之岳 劔之岳 是を八葉といふ(享保一八(一七三三)成『富士記(富嶽之記)』)「大日如来・阿弥陀・文殊・釈迦・普賢・薬師・観音・勢至・地藏」(延宝八(一六八〇)刊「八葉九尊図」(『ふじさんミュージアム展示解説』による) ●法印 前々号「見通しの法印」の項を参照。 ●阿闍利 仏教において弟子の規範となるもの。または密教で伝法灌頂を受けた僧。「あしやりめハするいやつたと時平い」(『川柳評万句合』明和四(一七八七)・信) ●権者 徳の高い僧。「末世の坊主男色にて事を濟せ女犯の害をまぬかれしめん」と遠きを慮(おもんはかごん) 権者の心不学無術の輩の容易しる所にあらず(明和六(一七六九)刊『根無草後編』三之卷) ●天津乙女 天女。天から降りてきて舞う少女。ここでは神楽を舞う少女をいう。後出の「あかひはかま」を着用している。「其時の風情(そのとき ふせい) 天津乙女の妹など、是をいふべし」(天和二(一六八二)刊『好色一代男』巻七の一) ●目のまひ足のふみ所 嬉しきで自然と手足が舞うさま。また、転じて慌てふためいているさまにもいう「手の舞い足の踏み所を知らず」からの転か。「たゝみやハ手のまひ足のふみ所」(『川柳評万句合』明和三(一七八六)・満) ●しらゆうかけに 知らず」と「夕影」を掛ける。 ●度拍子 神楽などで使う小さな金属製の二枚の円盤を打ち鳴らす楽器である「とびようし・どびようし」。表記は「銅拍子」「土拍子」など多様。 ●小御嶽石尊大権現 山梨県富士吉田市の富士山小御嶽神社。五合目にあたり、古くから富士登山の拠点となる。 ●

大山祇命 大山祇神・大山津見神(おおやまつみのかみ)。伊弉諾尊・伊弉冉尊の子とされ、後出の木花開耶姫と磐長姫の父とされる。 ●木華開耶媛 木花開耶姫。瓊瓊杵尊の妃。「延喜式内浅間神社は此山の神にして木花開耶姫を祭る」(寛政九(一七九七)刊『東海道名所図会』巻之五) ●孝靈天皇五年 誕生せしも 富士山誕生について伝承による。「そも〜此山は。むかし孝靈天皇即位五年に近江のみづうみはじめて湛へ。その土こゝにわき出てこの山となりたり」(万治年間(一六五八〜一六六一)刊『東海道名所記』二)「むかし孝安帝九十二年此山初て現ずとも又孝靈帝五年近州琵琶湖とともに一夜に現ずともいい伝たり」(『東海道名所図会』巻之五) ●思ひもほけぬ 未詳。

《翻刻》

扱頂 上は乾の峰かゞやく日尊ふしおかみ未勒が嶽の鳥帽子
 岩南無当来導師としどし〜(丁付なしオ)巖をふみならしいさむ
 心の駒かたけ聖徳太子を安置せりこなたの峰には毘盧舍那仏 旭
 の大黒薬師か嶽心の塵も打払ふ不浄か嶽の不動堂さいの河原の
 地藏尊六道のつけに反程な嶮しきみねを踏わけたる役の行者の跡
 を尋ねわけゆく山の其かたちも妙法蓮華経か嶽その儘(丁付なし
 ウ)うつして富士詣貴賤男女の差別なく行こふ袖はみな月のもちに
 ふり袖つゞら笠九折より嶮し山汗をかく袖広袖のひろひ世界と申
 せともこゝにや足のとまるそでこなたにつらなる山のうへ毘沙門堂

かたはらせうぎなら やまとちや
の側に床几並べし大和茶は幾代ふる木の松のもと枝は茂れど麦藁
の邪魔にはなら(丁付なしオ)ぬ日よけ也見渡せばむかふに目白
わせたむら 早稲田村なぐる、水は猪のかしら末せきかねし関口の滝のしら糸音
たえずこゝに簀の子を汲たてのひやつこく吹涼風にはつたり暑を忘
る、也さて十五日より十八日まで日夜をわかず群集なしみな人ねん
ずるねぎことの偏に丹誠こり場より落ちて流る、水茶やは(丁付なし
ウ)守宮が娘でもふりかけたやう衆人愛敬これそ柳のかけならね
としばしと人のたちとまるは口て岩が根目でしら齒此場のしぎ焼や
きたてを持ってくる間に手をとればはにくひおさん五田楽じやとそれ
から段々団子のくし櫛の銀むねあかさんとげに鄙人の洒落さへも
所 替れば(丁付なしオ)しなのそばとしも二八としられける池の
汀のかけ行燈蜘蛛手にならべし腰かけは心の駒下駄ふみならず茶汲
女の立姿みれば三河の八橋なり隣は大いひえの山廿十斗の中年増
しをり 塩尻つきのしほらしく名さへおふじといふなるべしこんおふじが
唐土にもあるかとほる、来ぬる毛唐人は(丁付なしウ)徐福にあ
らぬ茶一ツふくこれなん不老富士の葉茶がまの下にて焼そめしは誠
や狂言かや姫父の翁にのませしよりのかの郭橐駝に比したる翁千万
年の齢をたもちかの蓬萊を背負てゐる龜の甲より年の功おひずしな
ずの葉をは居ながら持葉にのむ了簡是をたゞとりの翁といふ(丁付
なしオ)
此冊子は借金(うそ)の山が住ひの老翁(はたけすいれん)の畠水練水辺の見たこともなひよ
しなしこと嘘言(うそ)は八百八百万の神代の遊ひのこと迄も口にまかせし

あて仕廻ゆめ／＼ほんにし給ふことなかれ
四国の去多彦(さるとひこ)しるす(丁付なしウ)

《語釈》

●乾の峰 剣が峰。富士山頂の火口周縁部にある峰の最高峰をいう。
これ以降、(高田)富士登山における指標となる箇所や山頂の八峰を
詠み込んだ道行のような行文となる。「其道通行成り難ク剣ノ峯ノ最
高頂ニ至ラザレバ」(『富士記(富嶽之記)』) ●日尊 かつて九合目
にあった「日のみこ石」をいう。(『八葉九尊図』) ●烏帽子岩 旧
七合五勺にある岩。富士行者の食行身祿が断食によって入定した場
所。「六十八歳にして。御山において入定とおもひ定めしかど。仙元
大菩薩より新に靈夢を蒙り。五ヶ年をいそぎ登山入定とおもひたち。
六十三歳にして享保十八年丑六月十日。妻子に向ひ。我つね／＼
六十八歳にして富士山へ入定と申わたせしかど。仔細有て今日登山
のおもひ立なり」と(享保一八(一七三三)成『烏帽子岩三十一日之
巻(不二行者食行祿)』) ●南無当来導師どしどし／＼「当来」は
今まさに来ようとする時。未来。「導師」に足を踏み鳴らす音「どし
どし」を掛ける。「手ぬぐひをちよいとあたまへのせてかた／＼の肩
をはづしいやな身ぶりをしてどし／＼とおどる」(天保五(一八三四)
刊『春色辰巳之園』後編卷之六) ●心の駒かたけ 勇んで前進しよ
うとする心情を馬にたとえる語「心駒」と旧七合三勺「駒ヶ岳」に
かける。「煩惱の綱きれやすく心の駒をとゞむるとはいへど、中／＼

胸の内むねうちこんらんして」(元禄一―一六九八)刊『新色五卷書』四之卷の四)「七成ノ終リ八成ノ初メヲ駒嶽ト云フ」(山ヲ十層二分チ一ヲ一成ト名ツケ)、『富士記(富嶽之記)』騎乗した聖徳太子の像があつたという。●毘廬舎那仏びろんざぶつびるしやなぶつ。密教では摩訶毘廬遮那仏・大毘廬遮那仏を大日如来とする。●不浄か嶽の不動堂ふじょうかたけのふどうどう。旧六合目付近。「是ヨリ樹林更ニ無ク又路蹊無シタ、巨石巉嶮トシテ皆イハカトヨチノホ、ヤ、チヤウケンツ、ウバフトコロフジヤウガタケ」キヨセキザノカン。嶽稜ヲ攀登ル此辺ヨリ稍寒ク重繭ヲ着ク此所ニ姥 懷 富士上嶽ト云フアリ」(『富士記(富嶽之記)』)●のつけに後方へ反るさま「むつくと起て六郎が。やらじと繩すがるを又一太刀。うんとのつけにそり返るを」(明和七(一七七〇)初演『神靈矢口渡』第三)●役行者えんのおつ。古代の修行者。呪術をよくし、修験道の祖とされる。また、富士山頂に初めて達したともされる。「昔有役居士得登其頂」(『本朝文粹』卷第十二「富士山記」)●みな月のもちもち。『萬葉集』三二〇番歌「富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり」による。「もち」は陰曆の十五日。「(行こふ袖は)皆」と「水無月」、「雪が」降る」と以後の「ふり袖」を欠ける。●つづら笠つづらかさ。葛籠笠。ツヅラフジで編んだ網代笠。「今嘉永ニ至テ初テ江戸男子用之。古ハ女用今ハ男用トナル。京阪ハ不用之。江戸モ特ニ風流ヲ好ム男子用之也」(『守貞謾稿』卷之二十九)●大和茶おほのちや。大和茶屋。江戸における水茶屋の一種。「元文四年、信州善光寺回向院にて開帳、両国五十嵐向小路に、大和茶壺おほのちやぶく一銭に売る茶屋出来、同朋町源七と云者、大坂者にて仕出す、段々今は町町に出る」(宝曆頃(一七五―

一七六四)成『江戸真砂六十帖広本』卷之十)『燕石十種』第四卷による)●猪のかしらいのししのかしら。井の頭池は神田上水の源流。かんたしやうするみなもと。●神田上水の源かんだしやうすゐのみなもと。池辺柳樹ちへんやなぎおほ多く初夏しよかの頃ころにいた至いたれば新葉しんえふあん黧々として陰かげをなし」(『江戸名所図会』卷之四)●関口の滝せきがたき。新宿区西新宿の(十二社)熊野神社付近にあつた滝。神田上水の水量を補うため引かれた、玉川上水から分水した神田上水助水堀の水流によつて滝となつた。『江戸名所図会』卷之四「十二社権現者」の項には「熊野瀧」の図がある。●はつたりはつたり。「すつかり」の意。「國便りはつたりといふ状か来て」(『川柳評万句合』宝曆一・義)●十五日より十八日やまひら。高田富士の山開きの期間。「毎歳六月十五日より十八日まいさいまで山を開きて参詣さんげいをゆるす」(『江戸名所図会』卷之四)●ねぎことまうではべ。神仏に祈願することから。「ふかき願事ねぎごとありて。夜毎に詣待り」(文化四(一八〇七)刊『椿説弓張月』前篇卷之五)●守宮まもりが娘むすめでもふりかけたやうまもりがむすめでもふりかけたやう。『和漢三才図会』卷第四十五によればイモリは多淫ゆえ媚薬になるといふ。また、イモリの黒焼きを思おもう人につけたり、ふりかけるとその恋が叶うといふ俗信がある。「此里のならひとて。初手しよては寝道具ねだうぐさへ出さず。床などの事思ひもよらぬに。太夫方たふからもだつて来て屏風びやうぶたてさせ。帯しながらに首尾しゆびさせて。其上うへにいとまごいの盃さか迄してお帰り。是は合点がてんまいらぬお客。此里はじまりてよりこのかた。つるに初会しよくわいにかふした図づはない事。若もはるもり黒焼くろやきにてもおふりかけなされたかと。揚屋あげ一家いっけふしん立たるも断ことぞかし」(宝永八(一七一)刊『傾城禁短氣』四之卷の一)

●これぞ柳のかけならね 、『新古今和歌集』巻三、西行の「道の辺に清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」による。●しぎ焼 、『前号「しぎやき」の項に同じ。●所替れば 、『としも二八としられける』慣用句「所変われば品変わる」と「信濃そば」を掛け、そばの値段の「二八（十六文）」と水茶屋の娘の年齢を掛ける。●蜘蛛手 、『三河の八橋』『伊勢物語』第九段を敷く。茶汲女の立姿をカキツバタに形容する。「みかはのくにやつはしといふ所にいたりぬそこをやつはしといひけるは水行河のくもでなればはしをやつわたせるによりてなむやつはしといひける』《略》そのさにかきつばたいとおもしろくさきたりそれを見てある人のいはくかきつばたといふいづもじをくのかみにすゑてたびの心をよめといひければ」(古活字版・嵯峨本) ●こんなおふじが唐土にもあるか 、『そうはない珍しいことを表す成語「こんな縁が唐にも有るか」をもじつたもの。人口に膾炙し、戯作類でも多く使用される。「浅之進を始として百餘人の唐人ども面々草履をはきつれて陸珍しく立出ればはかれし者は取すがりてこなえにしが唐にもあるかとなれ／＼しく悦びいさみ」(宝曆一三(一七六三)刊『風流志道軒伝』巻之五) ●徐福 、『史記』巻百十八「淮南衡山列伝」に登場する人物。不老不死の薬を求めたため秦の始皇帝に東南に遣わされた。「海中大神」に会ったが始皇帝の大神に対する礼が薄いと告げられ「令名男子若振女與百工(名家の男子と美しい娘、および多くの作物)」を要求された。戻って始皇帝に報告すると、始皇帝は喜び、三千人の男女と百工を持たせて徐福

を再び派遣したが、彼はその地に王となって留まり戻らなかったという。日本各地には、紀伊国熊野をはじめ徐福がそれぞれの地に達したという伝説が散在している。不老不死の薬を得るのに、蓬莱山に見立てた富士山を訪ねたというものがあり、葛飾北斎の肉筆画「富嶽と徐福」(北斎館所蔵)などの画題にもなっている。●たぐとりの翁 、『竹取の翁』の洒落。●四国の去多彦 、『四国、あるいは一般の人をあげていう語「四国猿」による。「湯を涌て水になるをも知ぬ奴原を号至極の空気とも四国猿ともいふ也」(宝曆五(一七五五)刊『禁現大福帳』一之巻) 了